

「イグウウウウウウウッイギュウウウウッイギイイイイイイイイイッツイグイグイグ
イイイイイグウウウウウウウウウッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥アア— — — — —

—————ツツツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

奈央が腰をへこへこッと素早く上下に振ると、ピストンをしているディルドの伸縮部分が腰の動きに合わせてグネグネと動き回り、決して奈央を快感から逃がさない。
ブシャアアアアアアアアアッと盛大に潮をまき散らしながら奈央は快感に理性を、思考を、人格を少しずつ焼かれていく。
どうして奈央がこんな状況に陥っているのか。
それは二日前に遡る。

「ありがとうございます。先輩」
「ああ、いいってことよ。可愛い後輩の頼みだしな」

奈央はとある大学の院生であり、今は同じ研究室に所属している後輩の研究の手伝いをしていた。
材質がシアアの黒色のギンガムチェック柄の長袖シャツに白色のスレンダーパンツという、無難な恰好をしている奈央は、椅子に座りキーボードを叩きながらもディスプレイとにらめっこしている後輩の背後で背を曲げて、パソコンをのぞき込んでいた。

「おっと、そこは.....こうだな」

横から身体を滑りこませて、奈央がキーボードを叩き、後背が悩んでいた部分を解決していく。
そして、しっかりと理解できるように丁寧にその部分の解説を行う。

「なるほど〜。理解できました」
「よし、流石だな」

ポンポンと優しく奈央が後輩の頭を叩いた。
その優しさに後輩が気持ちよさそうに目を細める。

「最初、先輩は怖い人だと思っていましたけど.....、凄く優しいですね」
「よく言われるなあ、それ。アタシとしてはもっと後輩には頼って欲しんだが.....この目が悪いんだよなあ」

吊り上がった目は鋭く、奈央の女性にしては高い、170cmほどある高身長から見下ろされると、どこか恐ろしくも思える。
だが、彼女の性格は姉後肌で、年下には優しく、接してみれば誰もが慕ってしまう女性である。

「確かにちょっと怖いですけど.....慣れるととってもカッコいいです」
「お前は口が上手いな」
「本心ですよ?」

後輩が奈央の方に顔を向け、嘘をつきそうにない無垢な顔でそう言いい、本心から言っていることだと分かったと、奈央はつい顔を赤らめてしまう。

「ああ、分かった分かった。ほら、そこも違うぞ」
「あっ、はい」

そうして平和な時間は過ぎていく。

「ふうう……先輩のおかげでなんとか終わりましたあ」
「アタシは少し教えてだけさ」

時間は夜の7時、外はすっかり暗くなっていた。
大学は駅の近くであり、二人はパソコンの電源を切り、電気を消し、戸締りをすると駅へと向かった。

「今日は本当にありがとうございました。また教えてください」
「ああ、遠慮なく頼ってくれ。暇な時ならいつでも力になるからな」

そう言って、奈央と後輩は路線が別なので、駅の中で分かれた。
奈央は時間通りに到着した電車に一時間程乗った。

（さて、帰ったら何をしようか……。まずは飯を作って……）

奈央の家は少し閑散とした住宅街にあり、8時ともなれば人の姿は全くない。
考え事をして歩道を歩いている奈央は一台のバンの隣を通り過ぎた。
その瞬間。
一人の女性がバンから降り、バツと奈央へと襲いかかった。
その動きは素早く、考え事をしていた奈央は気づくの一步遅れた。

「なんだ、おま——んんっ」

奈央は素早く片手を押さえられ、口に布を押し付けられた。

（くっ……、助けを）

そう思い、大声を出すために奈央はスウウツと大きく息を吸ったが、それは間違った行動だった。

「——はへええ……」

ビクンツと奈央の身体が震えたと同時に、奈央はそんな間の抜けた声を出し、つり上がった目はへにやりと垂れ、奈央は全身をくたりと弛緩させた。

「あはあ……あああああ……ああ……すううう……へひい……」

蕩けたその顔は多幸福感に包まれた者が見せる顔であり、原因は明らかに口を塞いでいる布にあった。

「おっと……これ以上は発情してしまうな」

そう言ったのは襲撃者であり、青いボンテージ服を着た女性だった。
そう、もうお分かりだろうが、彼女は美沙の右腕、エレナである。
何故、奈央が一瞬で麻薬をキメてしまったかのような、蕩けた顔になったかと言うと、それはエレナが奈央の口を塞いだ布に染み渡らせていたとある薬品のせいだ。
その薬品は美沙が開発した新型の麻薬であり、効果時間は短いが、その効果は強力だ。
少しでも気化したその麻薬を吸えば、奈央のように多幸福感に包まれ、幻覚を見せられてしまう。

摂取すれば摂取するほど依存していくのは麻薬の恐ろしい所だが、この麻薬は依存性はないが摂取すればするほど発情していく。
発情すれば、男女関係なく襲い掛かり、その身体を貪る獣になる恐ろしい麻薬だった。
だからエレナは布を奈央の口から離した。
連れ去るだけなら、この惚けた状態で十分だからだ。
こうしていとも簡単に、奈央は連れ去れたのである。

「く.....ここは.....」

奈央が目覚めると、そこは真っ白な壁だけの部屋だった。
正面には出入口と思われるスライド式のドアがあり、正面壁の上部の一部がガラス張りとなっている。
そこからエレナが奈央の姿を見下ろしていた。

「目が覚めたようだな、ヴァルキリーイエロー。貴様が正気を失っているうちに拘束させてもらったぞ」

壁に内臓されているスピーカーからエレナの声が部屋に響く。
喋っているのがガラス張りの向こうにいる人物だと分かったと、奈央は鋭くエレナを見つめた。

「拘束.....、ってこれは.....趣味わるすぎじゃねえか？」

奈央は冒頭のシーンの通りの格好をされてた。
真っ裸の奈央は、あられもない恰好を取られ、自分の何もかもを晒されて恥ずかしさに顔を赤らめる。

「で、お前は何モンだよ？ まあ、予想はつくがな。お前は美沙の手先だな」
「ほお、中々頭が回るようだな」
「簡単だよ。ヴァルキリーズと敵対しているのはアンタらだけだからな。けど予想外だぜ。まさか、美沙の作り出した組織がこんな変態組織なんてよお。アタシにこんな格好させて...
...しかも、アソコと尻にヘンなの入れやがって」

マンコとアナルにはすでにディルドが突っ込まれ、奈央は気づいてはいないがクリトリスには電極パッドが貼り付けられている。
自慰は人並みにする奈央だがディルド自体使ったことはなく、何か変な物が入れていると解釈した。
それが奈央を狂わせる道具の一つだとは、この時奈央はまったく思いもしなかった。

「これは美沙様の崇高な実験の一つとして行われる。お前は幸運なんだぞ？」
「ふざけんなよ。不幸だよ、こんなのは。こんな格好するくらいなら死んだ方がましだ」

顔は恥ずかしさで赤くても、物怖じしない言動から奈央が恐怖を抱いていないのはよく分かる。

「普通の女なら喚き散らすところだが、肝が据わっているようだな」
「捕まったって分かった時点で諦めがついてんだよ」

そう。
すでに奈央は諦めていた。
正体不明で誰だかわからないのがヴァルキリーズだった。
それがピンポイントで奈央を攫ったということは、他の面々の顔も割れているということだ。
恐らくすでに他の皆も捕まっている。
そう考える奈央は自分が助からないと悟ってしまっていた。

「.....はい、はい。了解しました。奈央。今からお前に美沙様からの言葉がある。そのままこちらを見続けろ」

そうエレナが言うと、ガラスに映像が映った。

「あああんっ♥♥あああっ♥あああっ、美沙さまあっ♥はあっ、ああっ♥いいですうううっ♥イクッ♥あああっ、チンポにイカされるうっ♥♥」

と、同時に喘ぎ声が部屋中に響き渡った。
映像では、ベッドの上で膝立の美沙が同じく膝立の女性の両腕を掴んで引っ張りつつ、腰に生えた立派な肉棒で犯している最中であり、ガラス面には犯されている女性の顔がどアップで映された。
その女性は幸せそうに微笑み、涎を垂らし、完全に快感に堕とされていた。

「なッ.....!!」

そしてその顔を見た奈央が驚きで声を出した。
驚くのも無理はない。
今、美沙が犯している女性は奈央の後輩だったからだ。

「くふふっ、見えるかしらぁ。今、貴女の後輩ちゃんを犯しているのよぉ」

奈央と接する時の、無垢で可愛らしい笑みを浮かべていた後輩は、今や雌の微笑みを浮かべていた。
はぁ、はぁと熱い吐息の音がスピーカーから聞こえ、映像が後輩の顔から行為全体を移すように切り替わる。

「あはあああんっ♥ああっ、先輩っ、美沙さまはあっ、凄く素晴らしいお方ですうっ♥私をっ、こんな気持ちよくうっ♥あああっ、イクッ♥ははあっ、してくれるんですよっ♥♥」
「デメェッ!! そいつに何をしたっ!!」

余りの光景に言葉を失っていた奈央が吼えた。

「くふふっ、ただ発情させただけよぉ。貴女を攫うついでにこの子も攫って使ってみたら...
...、とんだ拾い物だったわぁ。名器なのよぉ、この子のおまんこ。ヒダ肉はいっぱい吸い付いてくるし、締め付けもちょうどいい。ほら、後輩ちゃん？ 私のおちんぽ気持ちいいでしょう?」

「はいっ、はいっ♥気持ちいいですっ♥最高ですっ♥彼氏よりもっ、聡のよりもっ、太くてっ、硬くてっ、ずっと奥をついてっ♥ああはあああああっ♥♥イクイクうううううっ♥♥あああっ♥♥美沙さまのおちんぽっ、最高なのお〜っ♥♥」

「いいわねえ。後で色々教えてあげたらもっといろんなことが出来そうねえ」

後輩の全身はブルブルと震え、美沙が突くたびに小ぶりの胸が軽やかに揺れる。
ベッドのシーツには愛液が飛び散り、ジュブジュブと後輩の膣から美沙が放っていた精液が

掻きだされていく。

「さて……。それじゃあ、奈央。貴女、私の奴隷にならない?」

後輩を犯しながら、美沙が奈央にそう問いかけてきた。

「奴隷だと……?」

「そうよお。私の奴隷。私に永遠の忠誠を誓い、私が望めば犯され、人を殺す。私だけの道具に」

「ふんっ、ごめんだね。そんなのになるくらいならアタシは死ぬ」

鋭い目つきでガラス張りに映る映像を睨みつつ、奈央は毅然とそう言い放った。

「くふふっ、貴女ならそう言うと思ったわ。それじゃあ、実験を開始しなさい、エレナ」

「了解しました、美沙様」

「それじゃあね、奈央」

「ああっ♥ああっ♥せんばあいつ、先輩も美沙様に気持ちよ——」

後輩の言葉を遮るように映像が消えた。

「それでは実験を始める」

エレナがそう宣言すると、ベッドの側面から先端に小さな針が付いている機械の触手が2本、奈央の乳首目掛けて伸び、針が乳首へと刺さった。

「——ツう……」

痛みは小さく、そしてそれが奈央の感じる最後の痛みだった。

——バリバリバリバリバリバリッ!!!!!!

「ヒャヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッツツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

乳首に刺さった針から、クリトリスを覆う電極パッドから、マンコとアナルに突っ込まれて
いるディルドから激しい電流が迸った。

勿論その電流はオーガズムエナジーによって作られた電流で、全身が性器となって犯されて
いるような、想像もつかないような強力な快感が奈央を襲った。

(なんだこれなんだこれなんだこれなんだこれエエエエエエー————ッ!!!!!! 気持ち
いい気持ちいい気持ちいい気持ちいいキモチイイキモチイイキモチイイ————ッ
ツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥)

ブチブチと頭の中で何かが切れる音が鳴る。

目がカッと大きく見開き、瞳がギュッと中心に収縮し、ブルブルと震える。

全身は激しく痙攣し、縦に小さく平な乳房が軽やかに揺れ、膣と直腸には次々と愛液と腸液
が分泌され、二穴は強くディルドを締め付けている。

「オオオオオッオオオオオッオオオオオッオオオオオッオヒャアアアアアアアアアアアアアッツツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

ディルドもピストンを始め、膣奥と直腸奥をガツガツと餅つきのように乱暴に突きはじめ
る。

しかし、痛みなどは欠片も感じず、感じるのは逆らうことなど許されない、狂乱の快感。
奈央は叫んでただ身体を震わせ、肉体を駆け巡る快感の言いなりになっていた。

「ヒギュウウウウウウウッ♥♥♥♥ハヒイイイイイイイイイイッ♥♥♥♥♥ヒイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイッ♥♥♥♥♥♥♥♥」

——ブショアアアアアアアアッ!!!!

間欠泉のごとく盛大に潮をぶちまけて奈央がイク。
小豆ほどの大きさだった乳首はぷっくりと大きくなり、皮からひょっこり顔を出す程度だっ
たクリトリスも皮からはみ出るほど大きく勃起し、奈央の肉体が快感で歓喜し、変化してい
た。

「ハギュヒイイイイイイイイイイッ♥♥♥♥♥ドメロドベロトベロドヘロオオオオオオオ
オオオ
オオオ
オオ
オオオ
オオ
オオオ
オオ
オオ
オオオ
オオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオ
オオオオオオオオ
オオオオオ
オオオ
オ
オ

ビクビクビクビクウウウウッと筋肉の収縮が激しさを増すとともに、奈央の感じる快感
も大きくなっていき、奈央はショートカットの髪を振り乱しながら、首を左右に素早く振っ
て、呂律の回らぬ舌で言葉を紡いだ。

「ドメデエエエエエエエエエッ!!!! おかひくなるウウウウウウウウウウッ、狂
ウウウウウウウウウウウッ、こんらんでちにだくなイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイ
イイイイイイイイ
イイイイイイ
イイイイ
イイ
イ
イ

ブンブンと振る首を時折ピタッと止めて、背筋を反らせてビクビクと身体を揺らしながら絶
頂すると、再びスイッチが切り替わったかのように奈央は首を激しく振る。
その余りにも強力な快感は奈央に死を予感させる。
頭は常に真っ白な状態が続き、絶頂の快感で惚けてバカになっていく瞬間がとめどなく連続
で訪れるこの状況では、そう予感するのも仕方のないことかもしれない。
奈央にとって捕まった時点で、殺されると思っていた。
だが現実はこの人を理性のない獣へと堕としにかかる、おぞましい実験の被検体になり、
絶頂しながら死ぬという、余りにも情けなさすぎる死を予感し、そんな死に方は嫌だと否定
する。

「死ぬのは嫌か。だが、安心しろ。殺しはしないさ。殺しはな.....」

奈央の痴態を冷たい眼差しで眺めるエレナはそう呟いた。
ここでこの実験の目的を語ろう。
その目的はオーガズムエナジーによる人格消去である。
人格の崩壊で廃人にするのではなく、人格を消し去って物言わぬ人形にするのが目的だ。
さらにその空っぽになったところに新たな人格を埋め込むことが目的であり、こちらが本命
である。
人格を崩壊させるのは簡単で、今、奈央が流されている電流を数十倍強い電流を流せば、膨大
な快感で奈央は人格を崩壊させて廃人となるだろう。
だが、今回の目的である人格の消去は中々難しく、これまでに幾人もの女性が廃人となり戦
闘員へと改造された。
今回はその数十もの実験の末に発見した、丁度いい強さの電流で人格を消去している。
なぜ、わざわざ消去をするのかと言うと、崩壊させた人格に新たな人格を植え付けてもうま

く新たな人格が作動しないことが分かったからだ。

「現在の人格削除率は10%か。美沙様の予想通りだな。……そう、殺しはしない。ただその人格を消去するだけ。それだけだ」

「ギイイイイイイイイイッ♥♥♥♥オオオオオオオオッオオオオオオオオオッオオー
ーーーーーーーーーッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥イイイイイイイイグウウウウウウウウウウ
ウウウウウウウッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

獣にも似た咆哮を上げて熱い潮をしぶかせながら、奈央は大きな絶頂を迎えた。
脳内でブチブチと人格を形成してる何かが引きちぎれる中、奈央は幸福感など感じない、圧
倒的な深くて激しい快感の中を彷徨い続ける。

無慈悲な実験は続く。

彼女の人格を完全に焼ききり、消し去るその瞬間直前まで……。

そこまで至れば、最後のショーが幕開ける。